

# 神人共食のしつらい

小倉美恵子

プロフィール  
1963年神奈川県生まれ。文筆家、映画プロデューサー。2006年(株)ささらプロジェクトを設立。2017年川崎市文化賞受賞。著書に『オオカミの護符』(新潮社)、諏訪式。(晶文社より出版予定)、映画に『オオカミの護符』(文化庁映画賞文化記録映画優秀賞ほか)、『つし世の静寂(しじま)』(ともに井井英監督)、『ものがたりをめぐる物語』(製作中)がある。

座敷に円坐し、念仏を唱えながら大きな数珠を繰り返す人々。上座には、それを見守るように掛け軸が掲げられている。念仏講の「宿(当番)」の家では、掛け軸や数珠を預かり、馳走を用意し、講中の人々に先祖供養をしてもらう。

川崎市北部の農家の我が家には、今でも順番に掛け軸が巡ってくる。しかも、時を違えていくつもの掛け軸が。これは、複数の「講」に参加している証でもある。講の数だけ集落を巡り続ける掛け軸には、神や仏の姿が描かれているが、講の種類ごとに象徴する神仏が異なる。

映画「オオカミの護符」では、山岳信仰の御嶽講を取材しているが、そこでは大口真神(ニホンオオカミを神格化したもの)の姿が描かれた掛け軸の前に集落の講中が集う。同じ山岳信仰の榛名講、大山講をはじめ、無尽講、地神講など、十指に余るほどの講に参加している集落もある。

冠婚葬祭や屋根の葺き替え、あるいは道普請、川普請など、集落で暮らすには、皆で力を合わせる必要があった。講はその基盤であったが、一方で閉鎖的な前近代社会の象徴と見られ、様変わりする暮らしの中で、刻々と消えつつある。

この前近代のコミュニティを支えてきた講にも、

具に見てみると、現代人の視点から学ぶべき点が浮かび上がってくる。

わが土橋村には、寛保二(一七四二)年にすでに御嶽講の記録があることから、少なくとも一三〇〇年の間、掛け軸は集落の中を巡り続けていると考えられる。ひるがえって、近現代社会が生んだものの中に、果たして三世代以上をまたいで伝わるものがあるだろうか……、と考えると心もとなない。

なぜ、掛け軸は生き永らえたのか。取材が続けるうちに、掛け軸は誰の所有物でもないことに改めて気づかされた。ありとあらゆるものが個人所有となつている現代社会にあつて、誰のものでもないことで世代を超えてきた掛け軸は示唆に富んでいる。そして、講に集うのは現世を生きる人間だけではないのだ。掛け軸の前には神人共食の場ができる。そこには集落に生きた祖先や、恵みを与えてくれる風土が共にあり、人々の暮らしに節度や配慮、そして安らぎを生む源になつてきたのではないだろうか。

講の消滅が相次ぐ今、誰のものでもない掛け軸は、皮肉なことに誰も引き取り手がない。今は博物館を仮の「宿」とする掛け軸も少なくなっていく。

## 月刊 みんな

7月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>神人共食のしつらい<br/>小倉 美恵子</p> <p><b>特集 モノに願いを</b></p> <p>2 宗教的なモノをめぐる<br/>八木 百合子</p> <p>4 チベットの供養塔チオルテン<br/>小西 賢吾</p> <p>5 ヒンドゥー教の神とモノ<br/>福内 千絵</p> <p>7 トルコのイスラーム礼拝用絨毯<br/>田村 うらら</p> <p>8 日用品で呪いを吹っ飛ばす<br/>中川 千草</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/>アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民とたばこ<br/>彭 宇潔</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/>半人半獣のヴィシユヌ化身像<br/>三尾 稔</p> <p>16 新世紀ミュージアム<br/>ウイットウォーターズランド大学<br/>オリジンセンター・ミュージアム<br/>池谷 和信</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/>フランスのタミル人<br/>——「ディーパンの闘い」<br/>杉本 良男</p> <p>20 ながなんちゃ<br/>仔ネコたちを迎え、名づけ、送り出す<br/>永田 貴聖</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|